

# 大衆作家が描いた〈安保〉

——石坂洋次郎『あいつと私』と舟橋聖一『エネルギー』——

藤 井 淑 禎

## I

昭和三〇年代の石坂洋次郎と言えば、大衆文壇のトップスターであり、当代きつての人気作家だった。毎日新聞社が毎年行っていた「読書世論調査」の「好きな著者と好きな著書」ランキングでは、つねに「好きな著者」の三位、四位あたりを占めていたし（昭和二五年から四五年までの間、ベストテン落ちしたことは一度もない）、「好きな著書」として挙げられることの多かった『若い人』（昭和一二刊）、『青い山脈』（昭和二二刊）、『石中先生行状記』（昭和二四〜二九刊）、『陽のあたる坂道』（昭和三二刊）などといった作品も、知名度抜群だった。

ボクはかつて『純愛の精神誌』昭和三十年代の青春を読

む』（一九九四刊）という著書の中で「石坂洋次郎のために」という章をもうけて、このように戦後の石坂文学を概括している。

石坂の作家としての絶頂期はこの『青い山脈』（昭22）あたりから始まって、だいたい昭和四十年前後ぐらいまでとみていいが（この頃から夫婦そろって体調を崩し始める）、その二十年間のなかでもとりわけ、ひとつのテーマを追い続けて獅子奮迅の活躍をした一時期がある。それが本章で注目したい昭和三五年から三十八年までの四年間だったのである。『あいつと私』（昭35〜36）、『雨の中に消えて』（昭36〜37）、『河のほとりで』（昭36）、『光る海』（昭38）といった晩期の代表作がこの時期に書

かれていたのであり、そこで追求されていたひとつのテーマとは、性と愛の問題にほかならなかった。

『純愛の精神誌』という本の中的一章、という制約もあつて、以下では「性と愛の問題」をめぐつて、四作に代表される石坂文学が「規範としての純潔や純愛という思想とそこでどのような関係を結んでいたのだろうか」という方向に考察を進めていつているが、小論の主人公である『あいつと私』に限つて言えば、性と愛の問題はまだその前哨戦といった趣きであり、中心は男性と女性という問題、さらに言えばその違いや差別が、繰り返し問題にされている。

## II

『あいつと私』は、A大学文学部二年生の浅田けい子(「私」という女性を語り手として、高名な美容師モトコ・桜井を母に持つ黒川三郎(「あいつ」)を始めとする男女の学友たちが織りなす恋やら政治活動やらを描いた広い意味での学園小説である。けい子には、ゆみ子(高校生)、たえ子(中学生)、ふみ子(小学生)という三人の姉妹があり、母のまさ子と七十八歳になる父方の祖母をまじえての活発な女性論議は作品の根幹部分を成している。また、モトコ・桜

井の男性遍歴がらみでは、現在の夫の黒川甲吉、公認の恋人の園城寺孝夫、さらには三郎の実父で現在は在米のAらが登場する。ここから派生するのが三郎の性の秘密であつて、モトコの内弟子でかつてモトコの意を受けて三郎の性の相手をつとめた松本みち子なども、小波乱を巻き起こす。

もつとも、それらの中心にあるのは、けい子と黒川を取り巻く男女の学生たちであつて、才気煥発で行動力もある野溝あさ子、学生運動家の元村貞子とその同志の金森あや子、製薬会社の社長の娘で皆より一足早く結婚にこぎつける加山さと子(「バンビ」)、クリスチャンで優等生の磯村由里子、バスケットボールの選手の日高健伍、東北地方の県知事の息子でテニスのうまい桑原一郎、バンビに失恋したおどけ者の金沢正太、などが主な登場人物だ。

前述のように、四部作を貫流する性と愛へのアプローチもこの作品には見られるが、繰り返し問題にされているのは男性と女性というテーマであり、より具体的に言えば、男女の関係の過去・現在・未来という問題が展望され、考察されている。

そのために有効なのが、「私」(浅田けい子)を取り巻く五人の女性(祖母、母、年の離れた三人の妹)という設定であつて、たとえば、「うちで女ばかり生れるのは(中略)お

母さんの強い精力に影響されて」などと生意気な口をきいた次女のゆみ子に平手打ちを食わせた母のまさ子がすぐに反省して、「なんだかお前達つたら、とんでもないことばかり考えているようで……まあ、めいめいいいと思っただとをやっつけておくれ。ただし、めいめいの責任においてだよ。……ゆみちゃん、お母さん殴ったりしてごめんね。お母さんの娘時代に較べて、お前さん達、あまり変りすぎてるので、ついカッとなっちゃうんだよ」(一)と言いつたりするようなシーンに、この設定が生かされている。

このシーンでは続けて、「お前達は精子だの卵子だのつて……、二人でときどきそんな話をしてるのかい」と問いかけるまさ子に「そりゃあするわ、大切なことですよの……。」とゆみ子が答へ、「ああ、もう分りましたよ。日本も、戦争に負けたら娘達の柄がわるくなって……。私達の時代はそりゃあらしいものだったのに……。」とまさ子が「嘆く」場面が付け加えられている。

母の口調は嘆いているようだが、じっさいの心持は、お人形のように無意志に育てられた自分達に較べて、少しはムキ出しになっているかも知れないが、人生や社会に関する知識をまともな受け入れて育っていく私達の在

り方を、母流に肯定しているのだということがよく分るのだ。そして、そういう理解力のある母をもったことを、私たちは喜んでもいるのである。

### III

母の世代から娘の世代へと、かつての「無意志」状態からの脱出は、双方が「肯定」するところでもあったのである。変化は母と娘とのあいだに見られるだけではなかった。年の離れた妹という設定を生かして、長女であるけい子と妹たちとのあいだにも、同様の変化が予感されているのである。戦後、男女共学が実現したにもかかわらず、「そのわりに男女が溶けこんだ雰囲気は出来ていない」ことに関して、「私」はこんなふうに考えをめぐらしている。

もっとも、男女関係が開放的なものになったのは、戦後のことだし、経験不足で、思想に心理が追いつけないという段階にあるのだろう……。たえ子やふみ子が大学生になるころは、男女の交際も、もつとずうとくつろいだ日常的なものになっているにちがいない。もしかすると、そのころになると、女の言葉づかいも男のそれと同じものになっているのではないだろうか。現在だって、

たえ子やふみ子は、男そっくりの言葉で話していることがよくある。(2)

もつとも、それも「いまはまだ男の口真似の匂いがあるが、段々に板についたものになりそうな気がする」と、ここでも過去から現在、そして、より頼もしき未来へと続いていくであろう変化が肯定的に捉えられているのである。

「世界の文明国の中で、男と女の用語がちがうのは日本だけだときいているが、それはそのまま、長い間、男に従属させられていた日本の女の社会的な地位を示すものと考えてもいいだろう」。「男女が拘りなくつき合えない理由の一つに、男女の話し言葉がちがっているからだということであげてもいいように思う。私共にとつては、その慣習は当り前すぎることになっているが、考えてみると、ずいぶん不自然な差別をつくったものである……」。

いっぽうでは、「ねえ、ゆみちゃん、いまは女でも、男並みに解放された生活が出来る時代だから」(8)ともあるが、その解放もまだまだ十分ではなく、むしろ、話し言葉の違いに象徴される、あるいは起因する男女差別は、妹たちの時代を待って初めて、言葉の違いも男女差別も解消されるのではないか、ないしは解消されなくてはならない、

というメッセージを見て取ることができる。

けい子の現代女性ぶりに目を付けたモトコ・桜井が、けい子にモデルをやってみないかと誘う場面では、またしても母・けい子・妹たちとの世代差と、未来への期待感とが念押しされている。モトコの申し出に対して自分では決心がつかないけい子に意見を聞かれた母のまさ子は、「さあ、それがねえ、奥さん(モトコのこと―藤井注)からお話をうかがっていると、お前がそれをしてはいけない理由は、一つもないようなんだけど……。なにしろ私は、古い女の感覚を身につけている人間だから……。ただ、もう恐いような気がして……。」(12)と旧世代人ぶりを露呈している。

世代的には当然旧世代でありながら、「世の中のだった部分は、全部男でガッチリ固めて」いた時代に「それに強引に割りこんでいって、自分の立場を築き上げ」た経緯を持つモトコは、「山のふもとで、頂きを眺めて、嘆息ばかりついていたんでは、いつまでたっても山に登れませんわ。ともかく歩き出さなければだめですよ。けい子さん。……いまは女が、いろんなチャンスに挑むべき時代だと思っの」と鼓舞する。

それでも決心のつかないけい子だったが、そこへ飛び入りしたゆみ子が我こそはと積極的に自分を売り込み、モト



この恋人問題にも遠慮がないのを見て、けい子は「たった二つちがいの妹なのに、私は、ゆみ子の心理を動かしている(新しい波)を感じないではいられなかった」。「私よりか幼いと思っているゆみ子が、人生のいろんな知恵を、かなりたしかに身につけていることを知って私は驚いた。また、なんでも無鉄砲に喋ってるようで、相手を傷つけない新しいエチケツトにも感心させられた」。(13)

こうした、男女の違いや差別を乗り越えて、ほんとうの意味での男女平等を実現する、というテーマに照らして象徴的なのは、教室で女性蔑視的な発言をしたことが原因で女性陣からプールに突き落とされた黒川の、差し入れられたピンクのセーターやらチェックのスカートやらの女物の服を身にまとった「珍妙な恰好」(3)だろう。着替えのためにけい子の家に立ち寄った黒川を見てけい子の祖母が発する「お友達っていうが、この人は、男ですか、女ですか……」(4)という言葉は、ある意味では男女差別克服の究極的な表現でもあったにちがいない。

## IV

男女交際や性と愛の問題についても、世代差論や過去・

現在・未来の対比が繰り返されている。一例をあげれば、

好きな人へのアプローチ方法をめぐる、「将ヲ射ント欲セバ……」式の母の世代、結婚前には「二枚舌」でほめまくる祖父・祖母の世代、そして「そんな昔風なまわり道」はせず当たって碎ける式の若い世代Ⅱ黒川三郎方式の対比である。「断わられたら、三時間ぐらい煩悶したあと、ケロリとしてつぎの候補者にプロポーズします。結婚にも異性にも、甘い夢など持ちませんから……」(6)とうそぶく黒川に対して、けい子の母のまさ子は「男女の交際が日常的なものになると、たしかに夢はなくなるかも知れませんが」と応じ、「そうですね。夢もないかわりに幻滅もない、ということだったらいでしょう……」と続ける黒川に、「それだったら私も賛成ですよ」とけい子の祖母が賛同する、といった具合である。世代差をのりこえて、最終的には若い世代の提唱する新しい方式を肯定する方向へと向かうのである。

男女交際や性と愛の問題ということでは、けい子の身近で起こった性暴力事件に触発されてけい子と妹のゆみ子との間で交わされた、純潔の是非をめぐる論議に触れないわけにはいかないだろう。「あのう、姉さんは好きな人が出来て、その人が身体を求めたらどうするつもり——？」(20)と切り出したゆみ子は、「私なら、彼に身体を与えるわ。

それが自然なことじゃないの。結婚式なんて形式だけのものなんですもの……」と言い切って、けい子を驚かせる。

「みんなが自然なき方をしていたんでは、私共の社会生活というのは成り立たないのよ。個人的には不自然に思われることでも、みんなに共通したルールを守っていかなければ、混乱が生じてしまうわ」と、いったんは「慣習的な答え方」をしたけい子だが、その実、「女がほんとに解放されたら、そういう心理(ゆみ子が告白する「私のほうで彼の身体が欲しくなるだろう」という―藤井注)が当り前のものになるのかも知れないと、チラと思ったり」してもいたのだった。

「でも、自然なやり方は結構だけど、自分の行為に対して責任がとれないようでは仕方がないでしょう」

「もちろんだわ。責任ということは、私のすべての行為の中にちゃんと織りこまれてるわよ」

「それだったら、貴女は貴女がいいと信じた通りに行動したらいいでしょう。……貴女がたの仲間は、みんなそんなふうに見えるの!」

「さあ、話し合ったことはないけど、敲けば、あの人もみんな私と同じ音を出すと思うけどな……」

「たった二年ちがってね……」

ほんとうに、戦後の日本の女性は、一年と云わずに、つぎつぎと古い女の衣服を脱ぎすていつていることが感じられる。考えてそうするのではなく、において、かんで、脱皮していつているのだ。女というものはこんなじゃなかった筈なのに―と、男のほうでついついいけないぐらいに……。

## V

見てきたように、性と愛四部作の第一作である『あいつと私』は、男女の関係や、男女のちがいが、女性のおかれた立場や地位などをめぐって、男女や世代による考え方の違いを浮き彫りにし、また、過去と現在を比較することでありうべき未来を展望する、とてもいったような特質を持つ啓発的な作品であることが明らかとなった。

ところで、そうした特質と並んで、『あいつと私』にはもう一つ、顕著な時代の刻印ともいえるべき特徴が見て取れる。言うまでもなく、作中でのかなりの部分を占める六〇年安保をめぐる記述である。ここで、『あいつと私』の初出を確認しておく、『週刊読売』の昭和三五年九月一日号から翌年の三月一九日号まで、全二八回にわたって連載

された。連載の区切りは単行本化(昭和三六年五月刊)以降も受け継がれ、現行の『あいつと私』も全二八章の構成である。言うまでもなく、昭和三五年という年は、六〇年安保に揺れた激動の一年であった。ただし、そのピークはこの年の五月六月頃までであって、連載開始の九月には騒動はほぼ終息していた。

それらのことも念頭に置きながら見ていくと、そもそも『あいつと私』に最初に安保の影が現れるのはどのあたりだったのだろうか。小説の前半では、先にも触れた黒川のブル転落事件のてんまつにかなりのスペースが割かれている。そして、二、三日大学を休んでいた黒川が「何事もなかったように」登校するようになって何日か経った「ある日の昼休み」(10)、「私」を中心に、磯村、野溝、加山、元村の五人が丘の上で賑やかに弁当をかこむ場面が描かれる。そこで議論をリードするのが、恋人が党員の東大生だという元村貞子だったのである。元村は、政治運動とは距離を置きたいとの発言に対して、このように論難する。

「だめよ。若い者がそんな気持ちでいたんでは、世の中がよくなりっこないじゃあないの。私、政治運動、大賛成よ。新安保条約の細かいことなぞ分りっこないけど、

ともかくそれが戦争に反対する運動であること、政府がそれを通過させるために、多数の暴力を行使したこと等を承知してるだけでも、デモに参加する意義があると思うわ。(中略)一度デモに参加してみるといいのよ。身分や年齢や性別を超えた大衆のデモンストレーションの中にいると、まっ白い霰にバチバチ打たれているような生甲斐を感じるわよ。……今度のデモにみんな参加してよ……」

ここで元村が言っている「政府がそれを通過させるために、多数の暴力を行使した」云々は、五月二〇日未明の自民党による新安保条約の単独可決を指すと思われるが、それを受けてのデモへの誘いには、学友たちは一様に消極的だった。ばかりでなく、バンビこと加山さと子に至っては、来月あたり結婚すると爆弾発言をして、みなをおどろかせる。

引き続き、安保言及部分を追っていくと、バンビの結婚式が予定されている「当日になって、元村貞子が披露宴に出られないことになった。新安保反対のデモ行進に参加するためである」(14)という展開となっている。

「もしかすると、議事堂からT会館の横の電車通りをデモるかも知れないから、そうしたら一分間だけ、パンビのことをジーンと黙ってあげるわ。―そう云っておいてね……。今夜は、日本の歴史が変わるかも知れない大切な夜なんだから、パンビにはわるいけど仕方がないわ……」



以後、小説はしばらくのあいだ、T会館での結婚式と新安保反対のデモ行進の騒擾とをパラレルに描いていく。「私」、野溝、日高、金沢、磯村の五人が黒川の運転する外車でT会館に向かう途中、溜池の交差点で「国会議事堂の方から流れて来た、新安保反対のデモ行進」にぶつかり、三〇分も立ち往生させられたり、T会館の控室で待っていると、「外のお濠端の通りを行進する、デモ隊のうたう革命歌が聞えて来た」り、といった具合に、である。披露宴後、「私」、黒川、金沢の三人は、いっぽうで「何万という学生達が、国民のいろんな階層の人達と大集団をなして、今夜のデモンストレーションに加わっていることを思うと」(16)居ても立っても居られなくなり、元村らがいるはずのデモ隊のほうに引き寄せられていく。

国会議事堂の方の中空には、物の燃える炎のあかりが無気味にゆらめき、積木細工のようにボコボコした議事堂の尖塔が、白く、盲いたように、うすい藍色の星空の下に浮き上っていた。

議事堂をはさむ広い通りには、くろく、びっしりと人が溢れ、地の底からでも湧いて出るような凄じいどよめきが、そこらにこだましていた。(17)

三人が「議事堂の正面の方」に向かつて行くと、顔を血まみれにした者や負傷者の姿が目立つようになる。議事堂の正面前まで来ると「何台かのトラックが門の内側の空地で燃え上っていた。その明りの中で、学生達と警官隊が、棒で殴り合ったり石を投げ合ったりしているのだ」。そんななか、ひとり激して乱闘の渦の中に飛び込んで行った金沢が負傷し、二人は彼を介抱しつつ、安否が案じられた元村貞子の家へと向かい、そこで、こともあろうに同志であるはずの活動家たちに体を汚されて帰宅した金森あや子の半狂乱の姿を目の当たりにすることになる(19)。

バンビの華やかな結婚式との対比で始まり、最後は同志であるはずの相手から理不尽な仕打ちを受ける女子学生が無惨なエピソードで締めくくられる安保挿話だが、現実との対応ということでいえば、五月二〇日の強行採決以降、何度か繰り広げられた抗議行動のうちでも、描かれたような流血騒動にまで拡大したのは、樺美智子さんが亡くなったことでも知られる六・一五統一行動以外には考えにくい。そう考えれば、『あいつと私』の安保挿話は、五月二〇日以降のある日の元村のデモ勧誘(10)から六・一五(19)までは、それらの出来事を鮮明に記憶する現実の読者にも納得

できる形で時が流れていたと言うことができる。

もつとも、六・一五の翌日に東京六大学野球の早慶戦とおぼしき試合を応援に行く(20)という設定は、「政治」の相対化という点では意味があるものの、現実とは厳密に言えばわずかにずれる。東京六大学野球の春のリーグ戦の最後を飾る早慶戦はたいいてい六月上旬に行われており、現にこの年の場合も、六月四、五日が開催日だったからである。しかし、ふつうの読者にとってはそのくらいの誤差は許容範囲内だ。むしろ、バンビの披露宴に始まり、大学野球で締めくくるといふ(政治)の相対化の徹底こそ、石坂文学の真骨頂であると言わなくてはなるまい。

## VI

五月二〇日以降の時間記述の妥当さは見てきた通りだが、実は問題はその前の部分のほうにあった。

それ以前の部分を見ると、黒川がプールに突き落とされるのは、「初夏のある日」(2)、「何しろ六月のなかばに」(4)、となっており、そのあと二、三日大学を休んでいた黒川が再び登校するようになって何日か経った「ある日の昼休み」(10)は、「もうすっかり夏の陽ざしだった」とある。したがって、ここまでを読む限りでは「ある日の昼休

み」は六月下旬ころとみなくてはならない。

ところが、この直後に元村によって五月二〇日の強行採決と思しきエピソードが語られ、しかも、その場でパンビが宣言する「来月の結婚」は見てきたように六・一五と同日なので、「ある日の昼休み」は五月二〇日以降で、かつ五月中でなくてはならないことになってしまう。

言ってみれば、〈10〉の「ある日の昼休み」は元村演説の前あたりを境として、前の部分は「六月のなかば」以降の「夏の陽ざし」の頃、後の部分は五月二〇日以降の五月中のある日、というように、地層の断層のようなズレが見られるというわけである。

考えられるのは、構想半ばからの安保挿話の強引な挿入だ。実は初出の『週刊読売』では、「何しろ六月のなかば」は「何しろ七月のはじめに」となっていた。ズレがさらに大きかったのである。単行本ではそれを修正して「六月のなかばに」としたわけだが、安保挿話との整合性を重視するなら、「五月のはじめに」とすればよかったのだが、結果的にズレは、小さくはなったものの、最後まで残ることになった。

いずれにしても、『あいつと私』において安保挿話が倉卒かつ強引に挿入されたことはまちがいなさそうだ。ある

いは週刊誌への連載という発表形態が直前のトピックの取り込みを要請したのかもしれない。しかし、挿入は倉卒かつ強引であったとしても、『あいつと私』における安保挿話は、単なるトピックの表面的な取りこみにとどまることなく、いっぽうでは作品テーマと密接に結びつきつつ、他方では、たくみなアレレンジによってあの独特の石坂カラーを打ち出すのに成功している。

作品テーマとは見てきたように、女性の地位・立場や自立をめぐる問題だが、安保挿話の最初が「ねえ、貞子さん。今度のような政治運動は、どこかで女性の地位を向上させることにも繋がっているものなの？」〈10〉との問いかけで始まり、最後が、傷ついた金森あや子がつらい過去から解放されるためには経済的に自立するしかない、という「自活」のすすめ〈19〉で締めくくられているのは、安保挿話と作品本来のテーマとが見事に噛み合っていたことを証している。

進歩派の退廃を象徴する金森あや子事件と、安保などどこ吹く風の翌日の大学野球観戦とを両極とする、〈政治〉の相対化も、石坂文学の得意とするところだ。

じっさい、昨夜からのことを考えると、私達のいる環

境が、どんでん返しに変わるの、夢でもみているような気がする。

まず、バンビの結婚披露宴だ。それから西部劇を見て……。そのあとが新安保反対のデモンストレーションだ。それから元村貞子と金森あや子のくらあい悲劇にぶつかつて、……。いまは、うちの学校とW大学の野球の試合で興奮している。

ちよつと考えると、それらはバラバラな出来事が羅列しているだけで、一貫性がないようだが、しかし私達の場合、若さという絶対的な粘着剤が、すべてを有機的につないでいるのである。むしろ、バラバラな行動であるほど、底に一本つらぬいているものがあると考えてもいいほどののだ……。〈20〉

〈安保〉ばかりに熱狂するのではなく、結婚も娯楽も政治も悲劇も、そしてスポーツも、みな等価なのだ、という考え方。それこそが石坂文学ならではの「思想」だったのである。そして、進歩的文化人〈14〉やエッセ活動家〈19〉たちのインチキぶりを指弾しながら、「その時代に、日本の国をほんとうに動かしていたものも、こんど敗戦の死灰の中から日本を立ち上らせたものも(中略)素朴でお喋りが下手な

国民大衆のエネルギーだと思ふのだが……」〈14〉といったように、「国民大衆」、一般庶民への共感を熱く語るところなども、石坂文学ならではの〈安保〉へのアプローチであり、アレンジであると言つてよい。

## VII

前述のように、『あいつと私』が『週刊読売』に連載されたのは、昭和三五年九月から翌年三月までだったが、同じ頃、もう一人の大衆作家がやはり〈安保〉を素材として傑作小説を書いている。『文藝春秋』の昭和三五年一〇月号から一二月号まで連載された舟橋聖一の『エネルギー』という作品である。一〇月号は九月一〇日頃の発売だから、九月一日号から連載が開始された『あいつと私』と同時期の連載開始である。

石坂洋次郎と舟橋聖一と言えば、かつて『小説新潮』誌上に石中先生ものと夏子ものを連載して、人気を二分したライバル作家である。その二人が期せずして、〈安保〉直後の時期に〈安保〉を素材としてふたたび対決したというわけだ。

『エネルギー』は、東和大学女子寮に住む、ミス東和と噂される片森英子を主人公とし、そのまわりに、同室で活

動家の布原タマ、すでに婚約者もいる小矧やま子、全学連・中央執行委員の木沼、学問一筋の巻村、英子が憧れる杉下先生らを配して、恋と政治に翻弄される青春群像を描いた小説である。背景となつている時代は、昭和三三年秋から三五年六月までであり、二年近くにわたる学生運動の動向と、それを取り巻く政治状況とが、かなりくわしく辿られている。日本の政治状況や新安保条約についてどう考えるか、全学連や学生運動とどう関わればよいのか、さらには、デモに参加すべきかどうか、といった悩みが等身大で描かれるいっぽうで、恋愛をめぐるのは、英子をめぐる巻村・木沼のさやあて、木沼に魅かれるタマの淡い恋、政治対学問をめぐるのは、騒々しい世情と距離を置いた巻村・英子の三条西実隆研究、などがそれらかららんでくる。

「エネルギイ」、「激しい日」、「金権」の三部構成で、「エネルギイ」では昭和三三年秋の警職法改正反対闘争から翌年夏までを背景とし、「激しい日」では三四年一月二七日の安保改定反対の国会請願デモの混乱の中でタマが重傷を負うまで、「金権」では最初はタマの代役としてデモに参加するようになっていた英子が六・一五の国会周辺デモで公安の諸田に逮捕され、傷心の巻村が英子の思い出を抱いて東京を後にするまでが辿られる。

〈安保〉を核としつつも、戦後の日本の学生運動＝全学連の歴史が精細に紹介されていたことがわかるが、そればかりでなく、岸、河野、藤山、池田らを中心とする保守政界の動向なども、相当量を割いてぬかりなく紹介されている。これらを可能にしていたのは、言うまでもなく作者舟橋の全方位への関心にほかならないが、『あいつと私』における〈安保〉との比較で言えば、『あいつと私』の倉卒かつ強引な〈安保〉の取りこみとはおよそ対照的な周到さがここには見られる。

昭和二三年の全学連の結成にまでさかのぼって、その主義主張の変遷や共産党との関係の推移を辿り、そのうえで作中時間内の昭和三三年の警職法改正反対闘争に戻つてくるといふ周到さだ。以後の流れも、前述のように詳細を極め、もちろん『あいつと私』のような時間的錯誤などは入り込む余地すらない。

## VIII

時代状況の計画的かつ綿密な記述、という点で『あいつと私』とは大きく異なっていたわけだが、他方、『あいつと私』に見られた、〈安保〉を独自に咀嚼・消化し、アレンジし、作家ならではのカラーを打ち出す、という面のほ



うはどうだっただろうか。

結論から言えば、この点においても、『エネルギー』は見事に〈舟橋化〉された作品となっている。硬派の、いつけん舟橋らしからぬ政治的題材を扱っているにもかかわらず、だ。舟橋の得意とする、叙情、唯美、耽美、といった特質が、政治的題材のあいだを縫うようにして随所に見られるのである。

たとえば、政治一色の喧騒の都会を逃れて帰省した英子をつつみこむふるさとの自然は、こんなふうを描かれる。

夏。

英子は湖水のある裾野の町に、帰省した。その町の素封家だった昔にくらべると、今は二まわり程、縮小されていた。兄が父の名を継いで、主として製材工場を経営していたが、そのほかにも、手を拡げていた。

観光客でさえ、この湖を見ると、生き返ったようになるのだから、英子は裾野を走る小さい電車を下りて、ゆるい勾配の坂道を歩いてくると、突然、人家の屋根の向うに、青い湖水の表面が見える瞬間、もはや歩いてはいられない。といって、立ち止まってもらえない。そして無言でもいられないような強い感動にさしぬかれるの

が常である。〈「エネルギー」7〉

自然による癒しは、終章、傷心の巻村が湯治場を訪れる場面にも見られる。

巻村は傷心を抱いて、信越国境の山の湯へ来た。

冬ならばスキーで繁昌するのだろうが、夏はひっそり閑としていて、下界の物情騒然も知らぬ顔だった。そこは妙高の中腹だった。信越線を柏原・田口とすぎて、関山駅から、九キロほどのぼると、青い高原の中に、燕温泉、関温泉と二つの湯が湧いている。

温泉につかって、浴槽のへりに頭を靠せていると、二枚硝子をあげた向うに、キリッと晴れ上った夏空がまぶしかった。いつか、目をとじると、おのずから、浮かんでくるのは、あの日、自分から処刑の十字架にかかるのだと言って、露わにも双の手をひらいた英子の美しい裸身のイメージだった。〈「金権」10〉

叙情から耽美、唯美へと転換する場面だが、「自分から処刑の十字架に」云々は、布原タマの代わりにデモに参加するようになった英子を、非政治をつらぬく巻村がとがめ、

その背後に活動家の木沼の影を邪推して、「英子。君が木沼に許していないと言うなら、最後に、俺の前で、脱げ」  
〔「金権」8〕と迫った折のことを指す。

政治に巻き込まれていった英子との別離を覚悟した言葉だったのだが、その際、英子のとったポーズが、「昔長崎の西坂の丘で、切支丹伴天連の女宗徒が、まっ裸で処刑されたように、十字架にくぐられた形」だったのである。この場面、このイメージを頂点として、『エネルギイ』には、舟橋文学ならではのエロティシズムがいたるところで作品に精彩を与えている。

湖畔の町に英子を追いかけて来た全学連派の巻村がポト遊びにかこつけて、英子に暴力をふるおうとする場面。布原タマが重傷を負った一一・二七の国会請願デモの夜、巻村と夜通し町を歩き回った英子がついに唇を奪われる場面。六・一五のデモで公安の諸田に逮捕された英子が留置所で受ける屈辱的な仕打ち。女子寮を舞台とする布原タマや英子たち女子大生の生慾や暮らしぶりの赤裸々な描写等々。

そうした、叙情、唯美、耽美といった要素が、『エネルギイ』においては、〈安保〉や学生運動、政界の動向といった硬質の要素と混じりあって、見事に〈舟橋化〉された世界がうちたてられている。『あいつと私』において石坂が

〈安保〉をたくみに咀嚼・消化して、石坂的世界をうちたてたのにも匹敵する成果、と言つてよい。

最後に、下種の勘繰りをひとつ、付け加えておこう。既述のように、『あいつと私』に〈安保〉の影が最初に現れるのは、黒川が再び登校するようになって何日か経った「ある日の昼休み」(10)の元村の演説だったが、この部分の『週刊読売』に掲載されたのは、昭和三五年一月一日号であった。これに対して、警職法反対デモに布原タマや杉下先生が参加した部分も含む『エネルギイ』の第一回「エネルギイ」が発表されたのは、『文藝春秋』昭和三五年一〇月号(発売は九月一〇日前後)であった。したがって、時間的には、これを読んで『あいつと私』に〈安保〉の導入を着想することも、十分可能だったのである。もちろん、着想源はこれに限られるわけではない。〈安保〉の余燼はまだまだ至る所にくすぶっており、その意味でも、『あいつと私』への〈安保〉の導入は、半ば必然の成り行きだったのである。

(立教大学)